

平塚らいてうの会ニュース

らいてうの「憲法を守りぬく覚悟」によせて

「いのち・愛・平和」のつどいを

12・9

クソフォンも楽しんでいただけます。どうぞ大勢

らいてうの家オープンから四か月、思いがけないほど多くの方々にご訪問いただきました。長野県内からは地元上田市の方々はもとより県内各地から、また長野市で開催された日本母親大会の後には全国から、夏休みには首都圏からも、遠く金沢や姫路からも、そして地続きのあずまや高原別荘のみなさんも立ち寄ってくださいました。

九月に入ってから訪問が続き、「飛行機で羽田まで行き、新幹線で上田へ出てレンタカーで」という方もおられて、ただ感動の一言です。

そこで「らいてうのころざし」に共感するご意見に励まされ、オープンの年の締めくくりの行事として、シンポジウムとコンサートを開催いたします。今年の日米開戦（十二月八日）から六十五年、日本国憲法公布（十一月三日）から六十年でもあります。戦争放棄の平和憲法を投げ捨てて日本を「戦争する国」にしてしまおうとする動きが強まっている今こそ、戦後ひとすじに「憲法を守りぬく覚悟」を訴えつづけたらいてうの思いを語りつぎましょう。



デモ行進をするらいてう（1970年6月）

発行
平塚らいてうの会
〒151-0051
東京都渋谷区
千駄ヶ谷
4-11-9-303
TEL・FAX
03-3401-6383

ご出席は、杉森長子さん、小沢隆一さん、上原公子さんと豪華メンバー、そして中川美保さんのサ

お誘い合わせておいでください。なお、経費捻出のため「賛同金」もお願いしています。ご協力ください。
(会長 米田佐代子)

らいてう生誕120年・らいてうの家オープン
記念シンポジウムとコンサート

いのち 愛 平和

—「憲法を守りぬく覚悟」によせて

日時 12月9日（土）1時30分
会場 いきいきプラザ（台東1丁目区民館）

*第Ⅰ部 シンポジウム
〈パネリスト〉杉森長子さん（平和・人権教育センター） 小沢隆一さん（憲法学者）
上原公子さん（国立市長） 〈コーディネーター〉米田佐代子（らいてうの家館長）

*第Ⅱ部 コンサート
中川美保さん（サクソフォニスト）
☆参加費 1000円（賛同金も募集中）
主催 NPO平塚らいてうの会

らいてうの家を育てるために

前号ニュースで呼びかけた「らいてうの家を育てる会」の維持会員募集には、多くの方々からさつそく嬉しいご返事をいただきました。

来館された方が次々に入会、また友達にも声をかけて数名分まとめて送ってこられるなどで、現在、維持会員（一口二千元）が八十五口、特別維持会員A（二万円）が六十八口、B（十万円）が六口で合計百四十五万円の到達です。

本当にありがとうございます。引き続き維持会員、維持募金をよろしくお願いいたします。

＊ オープン3か月で2,000人余



新日本婦人の会長野支部歴史散歩小組の皆さん

らいてうの家オープンから三か月余、のべ二千人を超える方々が訪れました。七月に長野で開かれた日本母親大会前後には大型バスで来られた方々もあり、最高は一日に二百十九人。備えつけのノートにたくさんのご感想が寄せられています。

〔感想ノートより〕

＊木の香が心地よい「家」を訪れ、ベランダで涼風を楽しみました。らいてうの生涯にふれて女性運動の先駆者として尊敬の念を新たにしました。
＊とても心のおちつく場所です。親しみのあるスタッフの方たち。何度も足を運びたいところです。今晚はらいてうのお酒を楽しみましょう。
＊娘は岩手から、私は宮城から、日本母親大会に参加し、大会終了後、娘のリードでここを訪れる

ことができました。満足しております。
＊らいてうは私に女性解放への目覚めのきっかけを作ってくれました。小林登美枝さんにらいてうの日常生活を聞いたことを思い出します。丸窓の文机の前に座り、らいてうを身近に感じました。
＊また戦争に反対する運動をしなければならぬ時代になってしまった。平和を守り続けよう。

らいてうの家を訪ねて

「平塚らいてうの業績を形にして遺したい。それが出来なかつたら日本の女の恥よ」というようなことを榊田ふきさんはよく口にしておられた。その情熱に動かされて「平塚らいてうを記念する会」が発足し、当時、婦人民主クラブ（再建）会長だった私も呼びかけ人の一人に加えられた。

その後、名称も「平塚らいてうの会」となり、多くの方々の善意と協力が実って、榊田さん、小林登美枝さん念願の「らいてうの家」が完成したのはこの五月。お二人がこの日を待たずに旅立たれたのは本当に残念だった。

九月初旬、私はやっと「家」を訪れることが出来た。すべて地元の木材で建てられた「家」は、美しい木肌と木の香に包まれて落ち着いた素敵なたたずまい。女性の知恵と情熱と行動力、それに協力の力と全国からの善意で築かれた「家」。

そこここに、らいてうさん、榊田さん、小林さんの志が宿っているように感じられた。課題は山積だろうが、平和と女の砦として未来に向かって発展することを切に祈る。
(富永和重)

夏休みにパネルシアター

真田・平塚らいてうの会では八月十一日、夏休み子どもたちを対象に、パネルシアターと読み聞かせの会を開催しました。

協力していただいたのは、真田町で活動しているパネルシアター「玉手箱の会」と菅平の読み聞かせの会「ネッコワーク」の皆さんです。会場は「らいてうの家」から約五百メートルの距離にある薬草園の中のログハウス研修棟をお借りして実施。お母さんと一緒の子どもたちのほか、「らいてうの家」を訪ねて来られたお客さん、近所の別荘のご夫妻などで満席でした。

猛暑の中でしたが、高原の涼やかな風が窓から入り、心地よいなかで「金のお銀のお」「おばけなんかないさ」など、舞台も客席も一体となって楽しみ、とてもすてきなひとときでした。



薬草園内を散策

終演後、子どもたちは薬草園の草原や防風林の木影を駆けまわり、松ぼっくりを両手にいっぱい抱えて、目を輝かせていました。この催しが子どもたちの心に夏の思い出の一つとして残るとともに、この地に「らいてうの家」が建設され、らいてうの平和のころざしを伝えていくことも知ってほしいと思いました。
(花岡静枝)

里山を利用して健康づくり

七月九日、幸運にも雨の合間をかくぐり、四月にブナの苗木を植樹した「らいてうの森」で十時から笹刈りをしました。苗木は元氣よく育っていてホッと一安心。心地よい疲労の中「家」の家庭で初めてのバーベキュー、野草のてんぶらもおいしく満ち足りた交流の場となりました。

午後からは、兵庫県立大学自然・環境研究所助教の上原巖さんの特別講演「身近な里山を利用した森林療法の可能性を考える」。

「森林療法」とは、かつての高度経済成長期にブームとなった「森林浴」を、経済不況下に身近な自然環境に健康づくりを求める動きともあいまって、セラピーとして発展させたものです。市民と公・産双方からの取り組みが現在行なわれていて、林野庁も、二〇〇三年の報告書の中で、「森林環境を総合的に利用した健康増進のセラピーのことを森林療法（フォレストセラピー）」と呼称する」と発表しています。

高齢者・中年・壮年の健康づくり、ストレスの多い職業人のリフレッシュやメンタルヘルス、心身に障害や疾患を抱えている人のリハビリテーションや治療の一環として「森林療法」には新たな可能性があり、その取り



バーベキューを楽しむ

組みの様子をプロジェクトを使って見せていただきました。身近な森や林の中で、自分の好きな木を見つけたり、丸太運びの作業が心身を解放していく様子など、森と自然の力の奥深さに改めて気づき、私たちの生活にこの自然の力を取り戻したいと思いました。

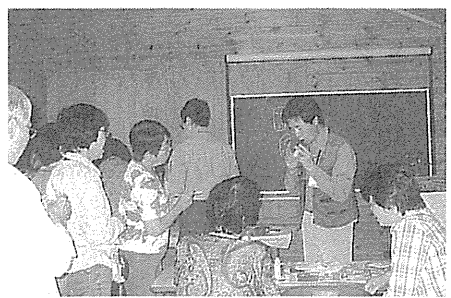
十月二十二日の「森のめぐみ講座」は十時より森林浴ときのご探訪。午後はトークセッション「森の力と人の生きる力」。講師はNPOしなのぐらし理事長・小淵登美子さんと長男の美宏さん。らいてうの家で開催します。(三留弥生)

林業にかかわる女性を囲んで

第四回森のめぐみ講座「林業に携わってー女性の視点から見た日本の森と山」は八月二十七日、薬草園の研修棟で開かれました。シンポジストは上伊那森林組合の古賀菜穂子さん、飯伊森林組合職員の遠藤寛子さん、NPO信州そまびとクラブ職員で長野県林業士の麻生知子さん、松本フォレストレディクラブ代表の西村いそ子さんと、司会は林政ジャーナリストの赤堀楠雄さんでした。

はじめになぜ林業に携わったかについての話でしたが、長野生まれは西村さんのみで、東京生まれの麻生さん、大阪、静岡で生まれ、信州大学で学んだ古賀さん、遠藤さんなど、家業ではなく自ら希望して林業に携わっている女性たちでした。日本の木が使われなくなったことが山の荒れる一番の原因。おいしい魚を食べるためには山をきれいにし水をきれいにしなければ、山はすべてが

コカリナを製作



命そのもの、作業をした後の山は葉っぱが元氣、山には無限の可能性があるなど生き生きとした発言が続きました。しかしまだ山の仕事は男性が圧倒的多数、でもちゃんとした仕事をしていけば認めてもらえるし、体力的に男性と同等でなくても女性の目での情報発信が必要とのことでした。話し合いでは、人工林と広葉樹・野生動物の問題、学校林での子どもたちへの教育、後進をどう育てるか、きのご狩りや山菜取りで山に興味を持つてもらうなど有意義な会となりました。

コカリナ作りと演奏

午後は、畔上正雄さんの指導でコカリナづくりに挑戦。なれない作業で四苦八苦、ようやく完成した自作のコカリナで運指表を見ながらドレミを練習し、最後は畔上さんに澄んだ美しい音色で演奏をしていただきました。(折井美耶子)

「らいてうグッズはいかが」

カラマツ材に「らいてうの家」と焼き込んだ素朴なコースター(二枚五百円)、同じく木製ストラップ(一個五百円)、「青鞥」表紙絵をデザインしたひとこと箋(一冊二百五十円)、同じくクリアファイル(一枚百五十円 三枚で四百円)

シリーズ らいてうの周辺

菅野すがの署名本を贈った

堺 利彦

堺利彦は、知る人ぞ知る明治社会主義者の草分け的存在である。しかし社会主義者になる以前から、家庭問題、婦人問題に深い関心を寄せ、一九〇一年から二年にかけて出した『家庭の新風味』はヒューマニスティックな筆致で当時の女性の無権利状態を描き、堺の文名を一躍高めた。その後社会主義者として歩み出してから、エンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』をベースに『男女関係の進化』を出したが、その前年の一九〇七年に『婦人問題』を上梓している。

「大逆事件」で死刑にされた菅野すがが愛読し、裏表紙に「幽月（すがの雅号）所有」と記されているこの『婦人問題』の一冊が、堺利彦の手に残されていた。新婦人協会の発会式に、堺から記念としてらいてうに贈られたこの本は、永らくらいてうの元にあつたが、いま女性の史の一証人として「らいてうの家」の展示ケースに収められている。来館した方はぜひお目に留めていただきたい。

女性の自我の目覚めを訴えた『青鞥』の運動が「新しい女」として世の非難攻撃を受けたとき、堺は社会主義者として『青鞥』の「中等階級的」であることに不満を持ちながらも「大いなる希望を嘱する」と評価した。

また堺は、実業之世界社発行の雑誌『女の世界』に「婦人界時評」を執筆しており、そのなかでらいてうについてたびたび論評を加えている。一九一八年十月号の「婦人界の三思想家」で「与謝野晶子、平塚明子、山川菊栄の三婦人」は「社会評論家として傑出」していると述べ、らいてうについては「明子さんの特異なる人格と識力とは何人も遂に認めざるを得ない」としている。堺は終生、暖かいまなざしで女性や女性たちの運動に応援を送り続けた。

（折井美耶子）

薬草園とのご近所づきあい

らいてうの家にほど近く、長野県の施設「薬草園」（正式名称は菅平薬草栽培試験地）があります。ここは戦後まもなく篤志家から、かつて上田藩が薬草を栽培したという故事にちなんで「薬草研究のため」と寄付を受けた土地およそ三万坪、薬草・ハーブ栽培地と自然林が気持のいい空間をつくっています。しかし近年財政難で管理が行き届かず、荒れたままに。今は上田市の薬剤師会や信濃生薬研究会、薬草クラブなどの手で少しずつ手入れがされています。

「家」に来る方に紹介すると散歩に行き、「すばらしいところだ」と喜んでくださいます。県の方からも園内の研修棟（ログハウス）を使ってもいいとお申し出があり、七月には薬剤師会主催の「ハーブと親しむ会」に参加、八月には信濃生薬研究会のみなさんと欲談しました。「来年園内の山桜が咲くころに花見大会を」と

いう声もあり、らいてうの家の「きょうだい」としてなかよくしたいものです。（米田佐代子）

〔事務局日誌〕

7月9日 植樹地の笹刈りの後バーベキュー、午後は「家」で特別講演「森に癒される」上原巖・森林療法研究者のお話

7月11日 長野県より衛生部長来館。薬草園の有効活用について懇談

7月15日 新日本婦人の会葬「石井あや子さんとのお別れの会」に出席

7月18日 「家」で米田館長の第2回らいてう講座第4回理事会

7月22日 日本母親大会分科会（於長野）らいてう分科会助言者米田会長（21〜24日）母親大会前後に「家」へ大会参加者が多数来館、400人を越える。

7月26日 羽田名誉館長を囲む懇談会

8月6日 あずまや高原自治会懇親会に米田会長出席

8月27日 森のめぐみ講座「女性林業士の方々のシンポジウム」コカリナづくりとミニコンサート（於薬草園）

8月28日 「家」の運営について話し合う会（於薬草園）

9月7日 事務局会議

9月8日 記録映画を上映する会理事会に出席

9月12日 第5回理事会

9月16日 「家」で第3回らいてう講座

〔おわびと訂正〕

前号ニュースで左記のあやまりがありました。「奥村直文さん」は「直史さん」に、上田市のパン屋さん「ラバン」は「ルヴァン」に、おわびして訂正いたします。